

C 五郎沼と嶋の堂千手観音

五郎沼の歴史と自然

C⑦ 五郎沼経塚が意味するもの

近世の一里塚は、^{ろてい}路程標の役割を果し、往来者に便宜を与えるために築かれた。同じ塚でも、^{くどく}経塚は宗教的な功德を目的とした写経供養の一形態であることから、主に寺社の境内や霊地・聖地とされた山頂などに造営された。しかし、南日詰（五郎沼）経塚は、一般的な造営場所とはかなり異なる場所に築かれている。ここでは、経塚の発願者の視点から南日詰（五郎沼）経塚を造営した意図を考えてみたい。

県内の経塚は、一関市から盛岡市までの北上川流域や当時の基幹道路である奥大道沿いに多く分布している。その分布は、かつての「奥六郡」（胆沢郡・江刺郡・和賀郡・稗貫郡・志波郡・岩手郡）の範囲と重なる。この特徴は経塚だけでなく、平泉藤原氏関連の遺跡の分布にも当てはまる。これらの遺構や遺跡から検出された土器・陶磁器類などの内容から、平泉藤原氏の支配論理や仏教文化の影響を最も強く受けた地域であったことが理解できる。

北上川流域や奥大道を縦軸とすれば、横軸はどうであろうか。丹内山神社（花巻市東和町）は、内陸部と太平洋側釜石方面を結ぶ北上川水系の猿ヶ石川沿いに鎮座する。丹内山神社本殿（県指定有形文化財）付近の丹内山神社経塚（県指定史跡）からは、石製経筒、^{いんちん}影青四耳壺・湖州鏡（県指定有形文化財）が出土している。

内陸部から日本海側横手方面を結ぶ北上川水系和賀川沿いでは、旧湯田町の峠山牧場Ⅰ遺跡A地区（西和賀町）から12世紀後半のかわらけが約60片出土している。同遺跡地内は、「秀衡道」と呼ばれる古道が通っていたとの伝承がある。

内陸部と日本海側の秋田方面を結ぶ馬淵川水系安比川沿いでは、天台寺参道の南方丘陵に所在する「土踏まずの丘」（二戸市浄法寺町）に12世紀の経塚がある。猿投短頸壺・猿投壺・須恵系波状文四耳壺・刀子などが出土している。こうした例から、12世紀に内陸部から太平洋側・日本海側を結ぶ横軸地点にも平泉関連の経塚や遺跡が存在したことが理解できよう。

北上川は、古くから水上交通の大動脈として利用されている。平泉は舟運の起点としてだけでなく、内陸の縦軸・横軸に通じる陸路の起点であったといえる。藤原清衡が陸奥の特産馬・砂金・漆・鷲羽などを京都に運んだと伝えられている「あづま街道（海道）」は、地元では「清衡古道」とも「秀衡道」と呼ばれている。その北の延長線上に志波郡の蓮華廃寺・赤沢白山神社・赤沢川がある。

この赤沢川筋は、かつて奥州最大の砂金産地として伝えられている。新山神社奥宮の東

側には、志波城への官道（駅路）を引き継いだ奥大道が奥羽山脈東麓を南北に縦走している。北上川や縦軸・横軸の水陸路は、都市平泉の流通や文化を支える水陸交通の大動脈であった。経塚はこれらの地域をつなぐ水陸交通路の要衝に積極的に造営されたと考えられる。

比爪館は、奥六郡の北側に位置するとともに、本州最北端の北方世界への入口という地勢的性格をもっている。南日詰経塚は、町内の経塚では比爪館跡に最も近く、五郎沼の南東端から距離を置いた場所に造営された。南日詰経塚は、比爪館跡の存在によって、その施主・願主は樋爪氏と理解されている。しかし、当時の経塚の施主・願主の階層は、全国的な傾向から僧侶が圧倒的に多く、在地の領主層でなかったことも指摘されている。

南日詰経塚の願主は、樋爪氏の可能性が考えられるが、それを特定する根拠がない。南日詰経塚は、大莊嚴寺が関与する聖地内に所在していることから、経塚造営の主体は樋爪氏以外の大莊嚴寺・薬師神社の宗教勢力も想定されるという視点も必要であろう。

経塚は、末法思想を背景に経典を将来に保存する意図で造立されたが、その意図は次第に近親者の極楽往生や一族の繁栄を願う功德を積む作善の営為となり、自国の平安を祈る作善の儀礼となったことも指摘されている。つまり、経塚造営の目的は、末法思想に依ったものだけではなかったという事例もある。

古刹高水寺の境内に、鎮守社として伊豆山（静岡県熱海市）の走湯権現が勧請されていた。その傍らに清衡が勧請した大道祖という小社があった。『吾妻鑑』には「而高水寺鎮守者。奉勧請走湯権現。其傍又有小社。号大道祖。是清衡勧請也。」（文治5年9月11日条）と記され、源頼朝が勧請したことは確かである。ここでは清衡が勧請した大道祖（道祖神）に焦点を当て、境界の信仰としての「道祖」を考えてみる。

道祖神とは、外部の邪霊・悪霊の侵入を遮る神で、郡郷や村落・集落の境界、辻、峠、三叉路など祀られる神と一般的に理解されている。

『延喜式』の四時祭式に「道饗祭」が記され、「道饗祭 於京城四隅祭」（『延喜式』巻第1神祇 6月祭条）とある。道饗祭は、6月と12月の晦日の大祓の後に、鎮火祭と同時に京の四隅の路上で「八衝比古」・「八衝比売」・「久那戸」の三神を祀り、悪霊の侵入を防ぐ祭りである。我が国の道饗祭祀は、地方官衙においても実施されたという。

この祭りは、災禍をもたらす鬼魅（妖怪変化）を路上で饗応して入京を防ぎ、京における災禍の予防・防御・防衛を目的としていた。この道饗祭は、直接的には経塚と結びつかないが、外部の邪霊・悪霊の侵入を遮る神である道祖神とどこか通底するものがある。

南日詰経塚については、北の玄関口であった志波郡の広域的支配を外部から守護する聖性を備えた宗教施設としての機能が期待されたのではないだろうか。